

人と自然と文化にやさしい地域づくり

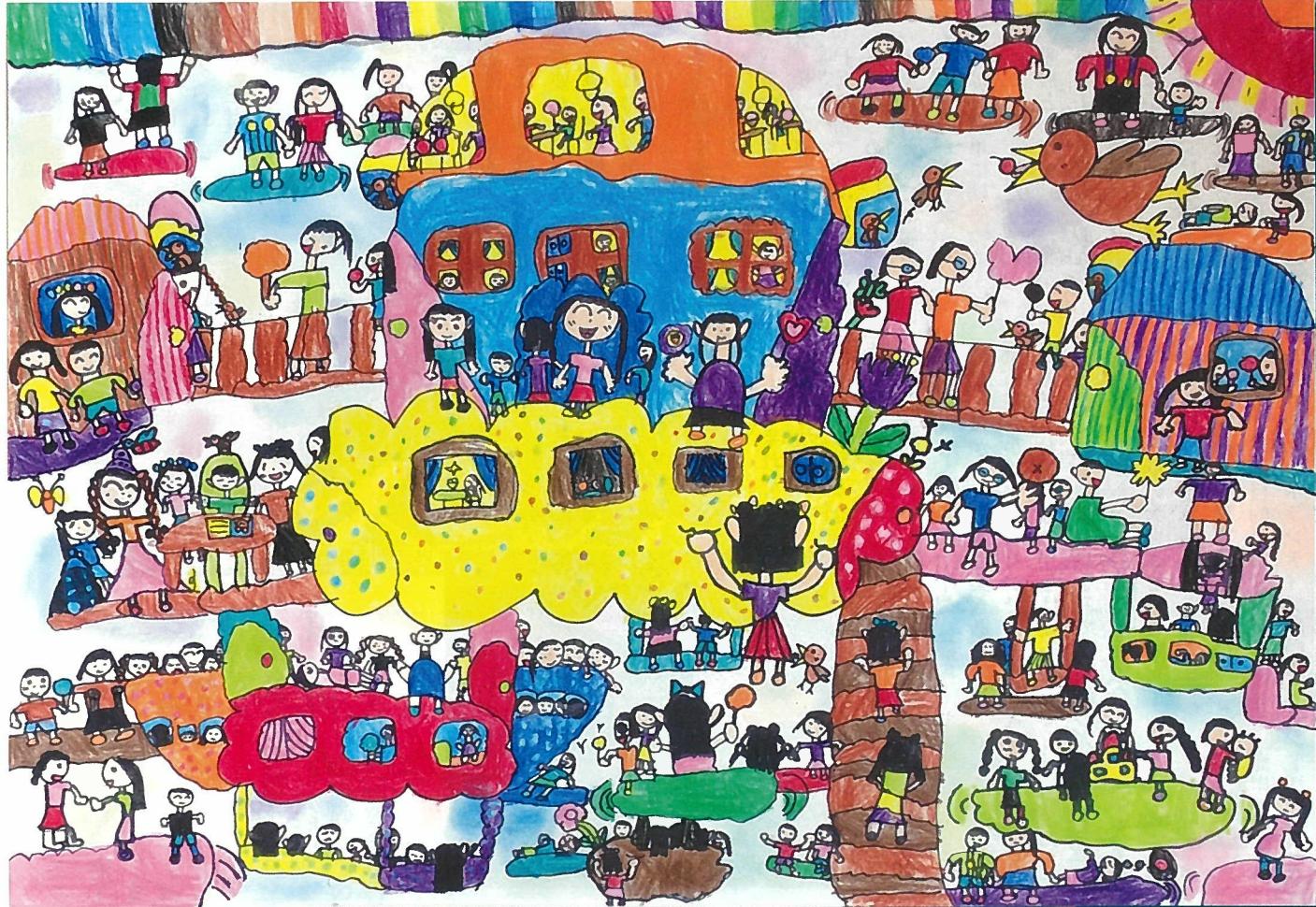
# 山口県教育

*Education of the Yamaguchi prefecture*

明日を拓く — 成果を検証する —

8

令和3年 No.1314



第73回山口県学校美術展 推奨作品

「くもの中のせかい みんなとってもなかよし」  
山口市立白石小学校 1年生(受賞時) 三名 美乃里

## ■提言 海の豊かさを守る

国立研究開発法人 水産研究・教育機構  
水産大学校 校長 須田 有輔  
水産大学校 水産学研究科 2年 梶原 楓  
水産大学校 水産学研究科 2年 清水 雅史

## ■チョウの生態から自然環境を学ぶ

光市立周防小学校 教頭 吉松 明子

## ■ボランティア活動で地域とつながる

光市立島田中学校 美化担当教諭 山本 雄也

## ■学校給食で食育の大切さを伝える

山口市立平川小学校 栄養教諭 熊野由佳子  
(山口県学校栄養士会会長)

## ■わたしの潤い 萩支部

藤本 和義

## ■コラム 山口大学

大学研究推進機構 知的財産センター  
特命教授 久保田 裕

一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykyoikuk.or.jp> E-mail [ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp](mailto:ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp)

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長:倉増誠彦/編集長:西岡 尚



あなたの  
アクションは…

山口県教育会がすすめる  
「元気やまぐち」三つのアクション

- ◎あいさつ 返事で 明るいやまぐち
- ◎笑顔でつなぐ 安心やまぐち
- ◎ゴミ 落書きのない 美しいやまぐち

# 海の豊かさを守る

## 浜辺を教室に



国立研究開発法人 水産研究・教育機構

水産大学校 校長 須田有輔

### 知られざる砂浜のすがた

三方を海に囲まれた山口県を縁取る、干潟、岩石海岸、藻場、砂浜と多様な海岸環境は、観光資源としても、漁場環境としても山口県の重要な財産である。これら貴重な財産を守るために、大学や研究機関、小中高の部活動、NPOなどが、それぞれの立場で研究や保全活動を行っている。

私は長年、砂浜を対象に生態系の研究を続けてきたが、これにはわけがある。山口県に限らず、日本は多様な海岸環境に恵まれているが、そのうち砂浜の生態系に関する研究は、干潟、藻場、サンゴ礁などに比べると著しく少ないのである。専門家の間ですら砂浜は不毛な場所だと言われ、ウミガメをはじめとした一部の生物を除けば、砂浜は生物の生息場所としては価値が低いと思われているのである。確かに、荒い波が打ち寄せ、乾いた砂が広がる砂浜には、簡単には生物を寄せ付けない厳しさを感じられる。でも、はたしてそうなのかという疑問が、研究の動機となつた。

山口の地に移り住み、初めてフィールド調査に取り組んだのが下関市の土井ヶ浜である。当時、砂浜のフィールド調査に関するノウハウが全くなかつたため、試行錯誤を繰り返しながら技術や知識を身につけ、研究室の学生とともに、昼夜を通しての調査を続けることができた。当初は、波打ち際の魚の生態調べており、自作の地曳き網を使って、真冬の冷たい海の中でも網を曳き、どんな魚が捕れるのか毎回楽しみであった。

### 社会人基礎力を育てる

数年間の研究を通して、想像以上に多くの魚が砂浜の波打ち際に現れることがわかり、その中には、シロギスやヒラメなど沿岸漁業の重要な魚種も含まれていた。土井ヶ浜での研究が元となり、その後、県外の砂浜でも研究を展開し、砂浜にも干潟、藻場、サンゴ礁などと同じく、豊かな生態系が築きあげられていることを少しずつ明らかにできた。調査に参加した研究室の学生も、初めのうちは疑心暗鬼でも、実際に、地曳き網に入る多様な魚を見て、砂浜の大切さを実感するようになった。このような経験をした学生が大学を卒業立ち、砂浜の大切さを少しでも世の中に広めてくれたらいいへんうれしいことである。



土井ヶ浜での魚類調査

山口県央を瀬戸内海に向かって流れ下る樅野川の河口には、全国でも有数の干潟が広がっている。ここでは、県内の産学官民連携・協働による干潟の保全活動が15年以上続けられており、私も研究室の学生を連れて活動に参加してきた。大々的に市民ボランティアを募つて行う活動の場合は、学生が主催者側のサポートにあたり、準備から撤収まで、現地スタッフの指示のもと働いている。また、小学生を対象にした砂浜の環境保全イベントでは、学生自らが講師役を務めている。社会人に求められるいわゆる社会人基礎力として、前に踏み出す力（アクション）、考え方（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）の三つが大切だと言われているが、これらの活動へ主体性をもつて参加することによって、学生は無意識のうちに三つの力を身につけることができる。この力は、社会人としてのものでないかと期待している。

私にとって山口県の海岸は、学生とともに学びあう浜辺の教室である。



波打ち際の魚

## 砂に目を凝らして



水産大学校 水産学研究科  
2年 梶原 楓

楓



【二枚貝の大きさを測定】二枚貝の成長の様子を調べる

「山口の海は沖縄のようにキレイだ」という先輩の言葉に誘われて、初めて訪れた土井ヶ浜の海は絵葉書のような青色で、出身地である大分県中津市のグレー一色の、色彩に乏しい干潟の海しか知らなかつた私の目には、ひと際輝いて見えたことを覚えています。同時にその時の私には、砂浜の環境というものが、あまりにも殺風景にみえました。誰でも簡単に力こや巻貝など多くの生き物を見ることができると、砂浜には生き物がまつたくないよう

に見えたからです。これは私だけでなく、砂浜は生き物が少なく、干潟と比べ価値が低いと見られていることが、むしろ一般的であることを後から知りました。

しかし研究室に入り、専門的な研究を通して干潟と砂浜双方の特徴を調べていくうちに、私の中で大きく見方が変わつきました。山口県内では櫛野川河口域の干潟や土井ヶ浜の砂浜で何度も調査を行いましたが、干潟には干潟の、砂浜には砂浜の生態的な特徴があり、生息する生物の量や種数をもつて優劣を比べられるようなものではないことを、次第に理解できるようになりました。それとともに、よく目を凝らせば、ほ

んの一握りの砂に多くの発見があることも知りました。私自身のこのようないい経験を活かし、研究室が行つてゐる環境保全活動に参加する際には、子どもたちに山口県の海岸に隠されたすばらしさを伝えることに心がけています。波打ち際の砂からすくつてとつた、大きさ1センチほどの砂浜の住人ハマトビムシを、小さな手のひらに乗せ、目を輝かせた子どもたちの笑顔が忘れられません。

## 海岸の環境保全活動に関わって



水産大学校 水産学研究科  
2年 清水 雅史

雅史

大学入学後、私が初めて環境保全活動に参加したのは、県央を瀬戸内海に向かつて流れる、櫛野川の河口域に広がる干潟での耕耘作業でした。これは干潟を耕すことと、生き物が棲みやすい環境にしようという活動です。その時は、干潟やそこに棲む生き物の知識をほとんどつておらず、小学生や一般市民など多くのボランティア参加者に圧倒されながらも、どこまでも広がり、知らない生き物が沢山いる、そんな干潟の自然を無邪気に楽しんだだけでした。

その後、授業や実習などで沿岸域の環境や生物について専門的なことを学ぶにつれ、沿岸域の自然に対する関心が日々高まり、卒業論文や大学院の論文では、沿岸域の生態系を研究する研究室に入りました。そこでは、マンゴローブ域の魚類生態にかかる私自身の専門的な研究を進め傍ら、研究室が行つてゐる、県内外の干潟や砂浜での環境保全活動にも積極的に参加しました。参加者の人々と活動を共にすることで、自分の中でも大きな学びがありました。小学生からは思いがけない質問をされて答えに詰まり、私自身の理解の浅さを反省したり、また、地元の人からは昔の海岸の様子を、漁業者か



【干潟の耕耘作業】干潟を耕し、生物が棲みやすい環境にする

らは漁業者ならではの海の生き物の知識を教えていただいたりしました。このように、キャンパスだけでは学ぶことができない多くのことを教えてくれる、地元の海岸の大切さを実感しました。私は大学院を出た後は、環境に関わる仕事に就き、研究を通して学んだ専門知識や技能と、地域の人々との交流経験を活かし、すばらしい海岸の環境を将来に残すことに役立ちたいと思います。

# チョウの生態から自然環境を学ぶ

## 周防小学校にギフチョウ、アサギマダラを乱舞させよう



光市立周防小学校

教頭 吉松明子

本校は、光市北部の「周防地区」にあり、近くを流れる島田川周辺に広がる美しい田園風景の中に位置している。

この周防地区には、珍しいチョウが飛来する。一つは、「春の女神」ギフチョウで、この地は日本南西限の生息地といわれている。桜の開花時に姿を現し、山口県の絶滅危惧種に指定されているチョウである。もう一つは、「旅するチョウ」といわれているアサギマダラである。アサギマダラは、春から初夏にかけて日本列島を北上し、秋に南下し、その飛距離は1500kmともいわれているが、このチョウも周防地区で飛来が確認されているのである。

### ギフチョウとの出会い

本校に着任した昨年4月は、学校は臨時休校中で、5月末まで児童と出会うことはできなかつた。しかし、着任後すぐ、周防小学校応援団「周防シニアクラブ連合会」の方々のおかげで無事羽化した「春の女神」ギフチョウと出会うことことができた。初めて見るギフチョウは、本当に優雅で美しく、「休校中で、児童に見せられないのが残念だ」と話すと、シニアクラブの方からは、「また、来



羽化したばかりのギフチョウ

以前から本校の3年生は、保護活動に関わる『ひかりエコメイト』の方と学習会をしていて。平成28年からエコメイトの児童は、ギフチョウだけでなく、学級園の花や植物、野菜、池の鯉、メダカなどたくさんの小さな命に囲まれて学校生活を送っているが、これらの小さな命は、たくさんの中学生が植えたフジバカマでアサギマダラが蜜を吸い、羽を休めてくれることを願っている。

年もありますから、大丈夫ですよ」といわれた。その言葉通り、手作りの飼育小屋の中で、サンヨウアオイの葉の裏にたくさんの卵を見つけることができた。



児童によるギフチョウの放蝶

### 小さな命にふれて学ぶ児童

本校児童は、チョウだけでなく、学級園の花や植物、野菜、池の鯉、メダカなどたくさんの小さな命に囲まれて学校生活を送っているが、これらの小さな命は、たくさんの中学生が植えたフジバカマでアサギマダラが蜜を吸い、羽を休めてくれることを願っている。

これからも教育活動を通して「ふるさと周防」の地域の一員として、小さな命があふれる豊かな自然環境を守り育てるために、自分たちにできることを考え、実践する児童を育成していきたい。

再び学校でたくさんのチョウが乱舞するのを見地域の方々と一緒に見よう、と、今日も児童たちは、花壇の世話を続いている。

期待されるアサギマダラの飛来

#### 『旅するチョウ』アサギマダラ

アサギマダラは、フジバカマを植え始めてから数年は飛来していたそうだが、昨年度は1頭も観察できなかつた。先日、ある児童が、まだ本物のアサギマダラを見たことのない私に、実際に飛来してきたときの写真を見せてくれた。こうやって、アサギマダラの飛来を楽しみにしている児童のためにと、シニアクラブの方々は、11月に花壇の土を全て入れ替えてくださつた。秋には、3年生が植えたフジバカマでアサギマダラが蜜を吸い、羽を休めてくれることを願つていて。



シニアクラブによる花壇作り

# 環境美化教育の実践を通して



光市立島田中学校

美化担当教諭 山本 雄也

本校は、第20回環境美化教育優良校等表彰事業において、全国の小・中学校の中から優秀校を受賞させていただいた。

「心を磨く環境美化活動」として現在行っている活動は主に三つある。一つ目は、委員会活動における定期的な地域のゴミ拾い活動。二つ目は、東日本大震災の被災地・福島を支援する「ひまわりプロジェクト」に参加し、花壇でひまわりを育て収穫した種を福島へ送る活動。三つ目は、島田川協育ネット（島田中・島田小・上島田小・周防小・三井小児童生徒、教職員、保護者、地域の方々）で開催されるピカピカデイ（島田中学校区の清掃活動）である。ここでは、ピカピカデイについて詳しく説明していただきたい。

## 活動のきっかけ

平成25年から始まつたピカピカデイは、当時、島田中学校区、特に生徒が毎日使う上下校の道をきれいにすることから始まった。発足当時は、島田中学校の有志生徒のみでの活動であり、道に落ちているゴミを拾うことをメインに行い、一定の成果があつたが、島田中学校区は広く、中学生のみでやるには限界があつた。そこでコミュニティ・スクールを活用し、平成29年からは4つの小学校と連携し、5・6年生や保護者、地域の協力を得ての美化活動となつた。

## 活動目的

島田中学校区の児童、生徒、保護者と地域の方々と共にボランティア活動することを通して、島田川協育ネットのめざす子ども像「地域とつながり、感謝や思いやりのある島田川つ子」の育成を図ることを目的とした。

## 実践事例

新型コロナウイルス感染症の影響がなかつた一昨年度までは、校区内の福祉施設・公共施設（保育園や老人ホーム、デイサービス、神社、コミュニティセンターなど）に伺い、施設内の窓ふきやゴミ拾い、草取りなどを行つた。新型コロナウイルス感染症の影響がでた昨年度は、密を避けた場所を探し、公園や川沿いのゴミ拾いや草取りを行つた。

## 成果

平成25年から始まつたピカピカデイは、年々参加者が増加し、コロナ禍の状況ではあつたが、昨年度の参加者は、中学生が9割以上、小学生は60名を超え、地域住民の参加も多数あつた。小学生が中学生に教わりながら掃除をしたり、地域の人との交流の機会にもなつたりしている。ピカピカデイなどを通して島田中学校の生徒にボランティア活動が根付き始め、様々なところで生徒が積極的に参加することができている。

育ネットのめざす子ども像「地域とつながり、感謝や思いやりのある島田川つ子」の育成を図ることを目的としている。

## おわりに

ピカピカデイを推進するにあたり、島田川協育ネット会長や各コミュニティセンター館長、各事業主、保護者の方々が深くかかわり、企画運営でリーダーシップをとつていただいていること改めて、感謝するとともに、今後も、協力して下さる方々に、少しでも還元できるよう、「心を磨く環境美化活動」に一層邁進し、日本一きれいな島田中学校区をめざしていきたい。



地域の方とともに行うピカピカデイ

床上浸水した集会所の食器やいすの汚れを洗い流す作業を行つた。生徒の任意による参加でありながらも、自分たちの町を自分たちの手で守りたいという生徒が多くあらわれたのは環境美化活動の成果の一つであると考えている。

また、日々の清掃活動にも力を入れ、「黙働（もくどう）」をキーワードに取り組んでいる。「黙ることで仕事の効率が上がり、さらに周りのことに気づくことができる。「働く」ことは、傍らを樂にすることであり、周りに貢献することができたという自尊感情を育てる。目の前に見えるものを磨き、きれいにすることで、島田中学校の校舎の築年数の割に、教室の床や壁、廊下はきれいな環境を保つことができている。

# 学校給食で食育の大切さを伝える



おせちする様子



山口市立平川小学校

栄養教諭 熊野由佳子  
(山口県学校栄養士会会長)

## 食育～おいしい給食こそが最高の教材～

### 1. 食育の大切さ

令和の幕開けとともに、全世界がコロナウイルスの脅威にさらされる大変な時代となりました。全国的な一斉休校に始まり、感染者数増加の波が何度も押し寄せ、各地で緊急事態宣言発令により社会・経済・教育とあらゆる活動がストップしました。学校再開により子どもたちの姿が見え、声のする学校は活気に満ちて本来の学校の姿を取り戻しました。

学校再開に伴い学習の確保が大前提となる今、学習の基盤を作る食育を含めた基本的生活習慣の大切さを再認識する必要があります。食べることは生きることであり、食育は生きる力を子どもたちに培っていくことです。

コロナ対応に追われ規制の多い学校生活の中でも、子どもたちの明るさと元気を中心救われているのは誰もが同じだと思います。全員がマスク生活で、お互いに相手の気持ちや反応が伝わりにくく、味気ない現状である反面、ネットの活用は飛躍的に進み、リモートでの会議や研修が増えました。子どもたちも例外ではなくタブレットを通して学習も進んでいます。

しかし私は、食育は学校給食を通じて学習する実践無くしては成り立たないものだと思います。給食室からしてくるだしの香り、揚げものの匂い、おいしさ、彩りは本物を感じてこそ意味があると思います。毎日食べるこれが当たり前と思つていている給食ですが、コロナ禍での給食停止による食べられない状況を通して、その存在の大きさと意義を再認識して食の大切さをしっかり子どもたちに伝えていきたいと思います。さらに、大変なこの令和の時代をたくましく生き抜いていくほないと願っています。

### 3. 山口県学校栄養士会の活動

本会は山口県内の学校栄養士からなり、会員は約170名です。会員は職場環境も規模(食数)も様々ですが、会員誰もが共通して、おいしい給食実現のため、そし

て子どもたちへの食育のため、日々取り組みます。

私たちの研修の柱となるのは、給食管理と食育です。

コロナ禍での活動も2年目に入り、昨年は休校期間に家で調理できるおすすめレシピのリーフレットを作成し全家庭に配布したり、おせちのいわれを学習できるおせちすごろくを作成したりして食育に活用しました。

今後も未来ある子どもたちのために、会員全員が一丸となって活動し研修を深め、会員の資質能力向上させ食育を推進していきたいと思います。

おうちで調理できる簡単レシピ

### 2. 栄養教諭の役割

栄養教諭は、給食管理と食育を二つの柱とし、一体的にバランスよく行う職務を司っています。二足のわらじをはく栄養教諭は多忙です。従来行つてきた栄養士としての仕事の給食管理や衛生管理はますます難しくなり、アレルギー対応も多岐にわたり神経をすり減らす毎日です。それに加え教員としての職務もこなし授業等で食育をし、食のコーディネーターとして学校全体の食育も考えなくてはなりません。

そうした私たちの心強い味方になり、食育の効果を最も大きく上げるのが美味しい給食の存在です。美味しい給食は子どもたちを積極的に食育へと引き込み興味関心をもたせ学ぶ意欲へとつながっていきます。給食は食育の生きた教材であり毎日の献立には食育教材としてのねらいと栄養教諭の思いがたくさん詰まっています。



## 季節の花便りを添えて

萩支部  
藤本 和義

平成26年3月定年退職後、教育会と退職公務員連盟の地区委員を引き受け、令和2年度からは、退職校長園長会の地区委員も加わって、毎月、担当地区の会員に機関紙を届けている。地区役員を引き受けた2年目のある役員会で、「会費集金前の月には、コメント付きのメモ用紙が付いていますよ」という話を聞いた。そうか、ただ投函するだけでなく、お知らせや何か気の利いたメッセージを添えるのも一案だなとの思いが巡った。

それは、担当会員の中に、ほとんど寝たきり状態の方がおられ、それでも会費徴収の時には、「こう見えて、読むのは大丈夫ですかね。今年もお願いしますよ。先生は、どこの出身ですか。昔はねえ」と親しく話され、会費をきちんと支払われる姿が心に残っていたからだ。しばらく懐かしいお話を付き合つて、「届け物は、郵便受けに入れときますからね」とお別れをしたもの、「しかしながら、ほとんど寝たきりで、週何回かのデイケアに行かれようだけど、ああやつて年に一回の集金でも、話し相手と思われて楽しみにされるんだろうなあ。かと言つて毎回話し相手になることも難しいしなあ……」と、ずつと気になつていたのである。

そこで、「コメント付きのメモ用紙」から思つたのが、「季節の花便りにメッセージを添えて、ご機嫌うかがいがてら、近況報告でも……」といふような一枚紙を作つてみようということだった。幸いに、勤務先でも「花づくりで町づくり」とばかりに、花いっぱい運動に取り組み、菊づくりもやつてあるし、季節の花の写真もスマホで

撮りだめているし……ということで、平成28年の6月号から、写真付きのメッセージを添えて機関紙を配布することとした。

写真は、庭先や散歩道の小花、季節の花や風景（桜、

### 終身会員の紹介

伊藤 隆 様 (山口) 國森 秀昭 様 (萩)  
武波英次郎 様 (萩) 師井 浩一 様 (宇部)  
村田 勇吉 様 (長門) 國井 貞宏 様 (下松)

### 定時評議員会

6月11日 (金) 山口県教育会館

#### 議事

##### 第1号議案

令和2年度(財) 山口県教育会事業報告及び決算について

##### 第2号議案

令和2年度(財) 山口県教育会益目的支出計画実施報告書について

※すべての議案が提案のとおり承認されました。

- (1) 支部の名称及び区域  
を変更しました。

岩国地区 (岩国、由宇、玖西、玖北、計4支部)

柳井地区 (柳井、大島、熊毛、計3支部)

周南地区 (光、下松、周南德山、周南新南陽、周南熊毛、計6支部)

防府地区 (防府、佐波、計2支部)

山口地区 (山口、吉敷、阿東、計3支部)

厚狭地区 (宇部、山陽小野田、美祢、計3支部)

下関地区 (下関、豊浦、計2支部)

萩地区 (長門、大津、萩、計3支部)



定期評議員会

### お知らせ

- (2) (1) 地区名は「教育県民大会」の開催単位とします。評議員さんから、「令和2年度の助成事業にくさんの応募があり、内容も今日的な課題を捉えた実践が行われており、たいへん素晴らしい」との感想がありました。

・6月18日(金)に開催予定の第1回支部長会は中止しました。

・新支部長は次の通りです。  
大島支部 大川幸枝  
下関支部 朝原嘉彦  
大津支部 三輪和明

会員数について	
通常会員	7,591名
賛助会員	517名
終身会員	1,514名
名誉会員	19名
合 計	9,569名
(令和3年2月1日現在)	

# 著作権・情報教育とプログラミング



山口 大学

大学研究推進機構 知的財産センター

特命教授 久保田 裕

(一社) コンピュータソフトウェア著作権協会 専務理事

昨年5月号に「著作権教育から情報教育へ」という

タイトルで書かせていただいた。そのコラムで触れた大学ラグビー部の先輩で、現在防府市華陽保育園の園長をされている竹内幹男さんから、私が青山学院大学の河島茂先生と共に著で2年前に出版した『A-I × クリエイティビティ情報と生命とテクノロジー』(高陵社) を大量に発注いただいた。情報教育は小学校からでは遅く、保育園から始めるべきだというご指摘も受け、まず、保育士の皆さんへの講演会を準備している。

一方、河島茂先生は昨年12月「未来技術の倫理」(勁草書房) を上梓されており、この本は情報社会を考えるうえで、私の思索の幅を大きく広げることになった。

山口大学ではこの2年間コロナ対応で対面授業を行うことはできていないが、6月には、知的財産センター特命教授として「著作物の教育利用に関する関係者フォーラム」にオンラインで参加した。本フォーラムは、ICT教育普及に伴い、授業目的で著作物をネット配信する際の補償金の考え方や、その運用指針を決定する重要な会議だ。昨年はコロナ禍にあって特例的に無償での運用が開始されたが、今年度は補償金の金額も決まり5月から施行されている。近年、教育現場にとって最大のトピックである。

また、昨年度から始まつたプログラミング教育も教育現場にとつては新しい課題であり、社会全体からも大きな関心が寄せられている。そのための教材は、さまざまな企業から提案、提供されている。

一例として、私が専務理事を務める一般社団法人コンピュータソフトウェア著作権協会理事会社のゼンリンからは、地図を使ったプログラミング教材が販売されている。その教材「まなづぶ」では、パソコンやタブレット上でブロックを組み合わせて指示を与えると、

隣に表示された地図に反映される。社会科での使用はもちろんのこと、地図上の距離から速度を計算するといった算数の授業など、様々な学習場面で汎用的に使える。

そのゼンリンの本社は北九州市にある。北九州市は、安心・安全推進課と特定非営利法人日本ガーディアン・エンジエルスが防災・防犯地図を作る「安全マップ」の出前授業を行っている。上記「まなづぶ」は、防災マップ作りや避難ルートの設定にも使うことができる。

私は、同じ北九州市にあるのだから、防災・防犯に関して協力したらどうだろうと北九州市など関係者に「まなづぶ」を紹介している。

防災を考える上で、地図は必須の情報だ。危険な山の斜面、川の氾濫危険地域、低地、高台、避難ビルの位置、道の広さ。地図には、避難ルートを考え災害を防ぐための情報が詰まっている。消防署や病院の場所、消火栓の位置なども防災に役立つ情報だろう。

子どもは通学路を中心に行動範囲にあるものを驚くほど詳しく知っている。道路の舗装状況、抜け道、家の大きさや並び、古い家と新しい家、橋の欄干、川への下り口、商店の看板、埠の種類や高さ。これらの全てではないがほとんどは地図で表されている。地図にないものを、子どもたちなら書き込むことができるかも知れない。それほど、地図には、子どもたちの身边にある情報が詰まっている。

道路の位置や抜け道、橋、商店や埠には、歴史的な経緯があるだろう。それらを調べれば自分が住む地域が、どんな歴史を持ち、どんな産業があり、どんな人が住み、人口が増えたのか減ったのか、ということが分かるはずだ。子どもたちが生まれ育った町に愛着を持つことは、これから地域を考える上で重要な要素だと思う。

国土地理院発行のものを除いて住宅地図や道路地図は、著作権の保護対象である著作物である。さらに家の大きさや立地は個人情報に関係し、地図はプライバシーを含む情報の集積でもある。町の歴史を知る入口であり、防災を考える重要なツールでもある。将来、地政学から見た国際問題を考えるといった社会を学ぶ上でも、地図を読むことは基礎的なスキルとなる。子どもたちにとって極めて身近にある地域、それを表現した地図は、防災を考え歴史を学ぶだけでなく、情報の価値や意味を考えるツールとして極めて有用性が高いと思う。ぜひ、これを授業に取り入れ活用していただきたい。